



# ミンガラバー

認定 NPO法人  
日本・ミャンマー  
医療人育成支援協会  
〒700-0815  
岡山市北区野田屋町2-4-18  
TEL: 086-224-0102  
FAX: 086-221-2554  
URL: http://www.mjcp.or.jp



受賞者を代表して謝辞を述べる岡田理事長

協会の岡田茂理事長がミャンマーの医療発展への貢献が認められ、山陽新聞賞(国際功労)を受賞した。

## ミャンマーの医療発展に貢献 岡田理事長に山陽新聞賞

岡山市北区のホテルグラビア岡山で1月10日にあった贈呈式では、作家の原田マハさんから受賞の10人3団体に松田正己山陽新聞社長が賞状とメダル、賞金を手渡した。受賞者を代表して岡田理事長が「受賞が今後の活動の大きな励みになります」と謝辞を述べた。

岡田理事長の山陽新聞賞受賞と去年秋の叙勲での瑞宝中綬章受章を称える祝賀会が3月21日、岡山市中区の岡山プラザホテルで催された。岡山大学の横野博史学長、協会の小出典男副理事長らが発起人となり、

### 叙勲と合わせ祝賀会

岡山大学長ら発起人 195人出席

195人が出席した。会は木股敬裕岡山大教授(協会理事)の司会で進められた。岡田理事長は挨拶で、自身のこれまでの歩みを①幼少から学生時代②米留学と京都大での研究③岡山大教授と医学部長④協



祝賀会場のミヨウキさん  
お祝いの言葉を述べるタンセインさん

会設立と活動の4つの時期にわけて振り返り、「協会の運営には費用がかかり、それを支えて下さる会員、賛助会員や団体、企業の皆様に心から感謝します」と話した。

ミョウキン元国立医学研究局長(協会ヤンゴン支部長)が出席。タンセイン理事長は「岡田先生の仕事に関わり、支えている人々のことを忘れません。私はその人々を誇りに思っています」とお祝いの言葉を述べた。

## 9回目 合計280台に

### 京都東ロータリークラブ 車いす寄贈



手前の車いすを贈呈後、病院長からお礼の記念品を贈られる駒井奉仕委員長(右)=パテイン

協会を通じてミャンマーに車いすを届け続けている京都東ロータリークラブ(伊藤久重会長)が2月11日、エーヤワディー管区の医療施設に35台を贈った。これが9回目で、寄贈の車いすは合計280台に。  
ヤンゴン西方のエーヤワディー管区の中心都市パテインであった贈呈式には、同ロータリークラブの世界社会奉仕委員長駒井潤さん、会員の佐々木邦泰さん、鶴田哲司さんの3人と、協会から岡田茂理事長、前坂匡紀理事らが参加した。現地で受入れの手配に当たったミャンマー国民健康財団のタンセイン理事長も出席。管区内の病院、診療所35か所にそれぞれ1台贈った。

### 引き続き贈る予定

駒井さんは挨拶で、31年

前、戦没者慰霊の旅で当時のビルマを訪れた思い出にふれたあと「引き続き車いすを贈る予定です」と話した。  
京都東ロータリークラブの車いす寄贈は、岡田理事長が京都大学の研究者だったときの恩師、故濱島義博教授(元京都女子大学長)が同クラブのメンバーだった縁で始まった。2009年にヤンゴンのリハビリテーションセンターなどに20台届けてから、寄贈を続けてきた。

### これまでの寄贈

- ①2009年 11月 20台
- ②2011年 10月 20台
- ③2013年 6月 20台
- ④2014年 3月 30台
- ⑤2014年 10月 30台
- ⑥2015年 10月 30台
- ⑦2017年 4月 50台
- ⑧2017年 10月 45台
- ⑨2019年 2月 35台

### 日本の実情を視察 ミャンマー政府

岡山大学と日本臨床工学技士会が中心になって、ミャンマーで初めて医療機器管理人材(メディカルエンジニア)を育成するプロジェクトが始まって1年たった。この春研修を終えた1期生の中から優秀な2人を招いて、来春から日本の大学でさらに2年間勉強

### 医療機器人材育成 日本でさらに2年学ぶ 岡山理科、東亜 2大学受け入れ

してもらうことになった。受け入れるのは岡山理科大(岡山市北区)と東亜大(山口県下関市)。ともに臨床工学技士養成のマスター課程がある。ここで学び、ミャンマーの指導者になってもらうのが目的。ミャンマーの医療現場では最新の医療機器を導入し

ても、それを操作し保守管理にあたる技術者がおらず、人材の育成が急務になっていた。去年スタートした日本側のプロジェクトは年間18人から20人ずつ、5年間で約100人を育てる計画。事業費5.5億円はJICA(国際協力機構)が負担。プロジェクト全体の調整役を協会理事の木股敬裕教授を中心に岡山大が担当している。

メデイカルエンジニアについて、ミャンマー保健省は育成に乗り出し、5人が1月末から2月初めに日本

の実情を視察した。一行は同省保健人材局のチョウソウユニオン課長とヤンゴン医療技術大学のタンジーライン学長、エイエイキン臨床検査学科長ら。岡山大をはじめ岡山理科大、東京医科歯科大、さらに医

療機器メーカーのニプロ、テルモなどを訪れ、日本でどんな教育が行われているかを聞いたり、最新の機器の説明を受けたりした。ヤンゴン医療技術大に医療工学士養成の学科新設が決まっているという。

### ナガ族の正月訪問

ミャンマーには、外国人の立ち入りが禁止されている少数民族の居住地域が多い。その1つ、ナガ族の場合は正月に限って入れると知って、1月中旬、協会の岡田茂理事長が訪れた。2016年12月20日発行の「ミンガラバー」37号で、元東京外国語大学ビルマ語科講師の土橋泰子さんの寄稿「ナガという少数民族」を読んで以来、関心があつた。協会の岡山協立病院医師豊田博さん、皓子さん夫妻と同医師植木千代さんが同行。これは植木さんの訪問記です。

## 岡山協立病院 植木 千代 医師



# むかし抗争 いま友好



勇壮な踊りを披露するナガ族。サガイン管区レイシー

## インパールの道、胸痛む

ナガ族の正月の祭りに行きました。インド北東部の国境の丘陵地帯に住んでいますが、ナガ族と言っても一つも民族ではなく、その中でさらにいくつにも部族に分かれています。政府に登録されているだけでも65種類、実際には100種類以上とされ、それぞれ違う言葉を使います。かつては部族間で抗争や首狩りが行われていたのが、現在は友好や観光のため年に一度、正月祭が催されます。開催地は年によって異なり、2019年はレイシーという2500人程度が住む村で行われました。各部族の代表らが飛行機や車、船を乗り継いでやってきていました。

私たちは村々の訪問もしました。岡田先生は「ミンガラバー」37号の紙面を持参。そこには筆者の土橋先生と民族衣装を着たナガ族4人が一緒に写っている2006年の写真が載っていますが、なんとソムラという村でその人たちと会うことができました。ミャンマー全体では9割が仏教徒と言われていますが、インド北東部のナガ族はイギリスの影響で9割がキリスト教徒であり、各村に教会があり、訪れた家で一緒に讃美歌を歌ったのは、ほっこりとした良い思い出です。音楽が趣味の私は、音楽が世界の共通言語になることを実感しました。

太平洋戦争で過酷を極めたインパール作戦で日本軍が歩いた道でもあります。車でも気が遠くなる道のりを灼熱の中、50kgもの荷物を背負い、どんな気持ちで歩いたのだろうか。胸が痛みました。一方、現地の人からすると武器を持った外国人が食べ物や盗みに来ることもあり、とても怖かったそうです。村を守るため勇敢な男が1人の日本人を殺しました。そのことを称える石碑が立っていました。ソムラの中学校の校長先生は「それが今、日本人がここに来てくれて嬉しい」と話してくれました。



話してくれました。ナガ族には納豆を作っている文化があると聞いていたので、とても楽しみにしていました。実際に、各家では必ず手作りの納豆があり、試食させてもらいました。中にはアンモニア臭が強く「ウツ」となる納豆もありましたが、日本の納豆そっくりなものも多くありました。

いよいよ、お祭りの日。ミャンマーのメディアや世界各国からの観光客が来て、みんなナガ族のカラフルな小物などを身に付けてそれはもう賑やかでした。ミャンマー側のナガ族に加え、インド側に住むナガ族も参加し、それぞれ異なる衣装、歌、踊りを披露しました。やりや刀を振りかざした勇ましい姿は首狩り族の末裔を思わせましたが、近づいて写真をお願いすると笑顔で応じてくれました。中には長い人毛を飾りにしている衣装もあり、びっくり。「彼らの奥さんの毛だよ」と笑って話してくれた人がいましたが、冗談か本当かわかりません。

祭りでは人が集まる人々に、正しい医療知識やトイレの衛生について知らせるポスター、麻薬の危険を訴えるポスターなども掲示されていました。以前と比べると車の通れる道や、新しい病院や小学校も整備され

### 何か役立てば...

ているようでしたが、山の中に点々と無数の村が存在するこの地域では、十分な医療や教育への道のりはまだ長いだろうと感じました。そう簡単に行ける所ではありませんが、機会があればまた行きたい、そして何か少しでも医療の役に立つことをしたい、と思いました。

### 協会だより

## シンポで講演や発表 医療支援 手術指導も

協会にとって年初の恒例になっているミャンマー医学研究大会への参加と現地での手術指導などの医療支援活動。今年も1月に、岡山大学を中心に大勢の医師らが出かけた。

ヤンゴンで催された医学研究大会はミャンマー医学界最大の行事。このシンポジウムでは岡山大の西堀正洋教授(薬理学)が「敗血症の病態生理よりみた診断と治療」のテーマで講演し

また、岡山大の中尾博之教授(災害医療マネージメント講座)が最新の災害医療について発表。木股佳裕教授(形成外科)と谷西英紀助教(麻酔学)、臨床工学士の岩井九三さん、医療機器会社の小丸義範さんがメディカルエンジニアの育成について話した。

### クリニック見学

岡山学芸館高校(岡山東区、森健太郎校長)の生徒11人が去年12月、1週間、



ミャンマーへ研修旅行に出かけた。馬場善久副校長と音田高志教諭に引率された、当時は1年生の男子4人と女子7人。全員が医進コースで、医療施設の見学をするのが目的だった。

生徒が、この体験からクリニック寄付を思い立って募金活動をし、学校側も協力して翌17年にできた産院だ。このあとミャンマー国民健康財団が運営する自閉症センターを訪れた。

最初にマンダレー郊外で日本人医師が運営する慈善病院を視察。ヤンゴンでは八田クリニック内の「岡山学芸館高校産院クリニック」を見学した。写真は2016年に同校初のミャンマー研修旅行をした

ミャンマー屈指の観光霊地ゴールデンロックなどを見る予定だったが、9人が食中毒を発症し、中止に。引率教員の早期の病状把握と岡田理事長と現地医師の連携による投薬指示によって、幸い軽症ですんだ。

### 編集後記

叙勲と山陽新聞賞と、慶事が続いた岡田理事長。数え80歳の傘寿(さんじゅ)でもあります。普通なら、あとは「余生」「老後」「隠居」といった言葉を連想しがちですが、理事長には、そんな言葉は無縁のようで、ますます元気です。今年も1月はミャンマーを2往復し、2,3月にも出かけ、この紙面が皆さんのお手元に届くころにも彼の地にはいるはず。聞けば、京都大学にいた1987年に初めて訪れて以来、ミャンマー渡航はこれで96回。この分なら年内に100回達成か。そのときは紙面で振り返ってもらいます。(西崎)